

[2021年度 入選]

現代日本の幸福な若者が抱く「不満」の正体 ——小さな不満を愚痴り、共感し合う若者たち

並川 百合

目次

はじめに——研究の背景・問い・目的

第1章 これまでの若者論で語られてきた若者像

1-1 今が幸せな若者たち

1-2 「優しい関係」の中の若者たち

第2章 データから考える若者の不満の現在

2-1 コロナ禍における若者の生活満足度

2-2 若者の人間関係における不満

2-3 コロナ禍がもたらした若者の不満

第3章 個人的・短期的な不満を抱く若者たち

3-1 社会的な不満と個人的な不満

3-2 長期的な不満と短期的な不満

第4章 SNSによる不満の可視化

4-1 他者との比較から生じる不満

4-2 共有と共感

おわりに——「不満」から「愚痴」へ

はじめに——研究の背景・問い・目的

「幸せ」な若者が抱く不満とはどのようなものであるのか。

2021年、日本での世帯におけるスマートフォンの保有率は、総務省の報告によると8割以上に及ぶ(総務省 2021:50)。その中でSNSの利用率は、2020年時点で全体の48.6%、そのうちの71.5%が20~29歳の年齢層であり、SNSは若者を中心に普及していると見ることができるだろう。その中でも、特に「Twitter」や「Instagram」といった、利用者自らが発信する側として使用されるSNSでは、様々な若者の様子が見られる。日常生活の中で感じたことの言語化や、体験したことの共有、思い出の記録など、多種多様な使われ方の中で、その大部分は「幸せそう」な若者の姿ばかりであると思われる。

しかし、筆者の身近な若者のSNSを見てみると、楽しく明るい日常生活があふれている一方で、不満や愚痴などのネガティブな内容も、絶えず発信されている様子が少なからず見られる。例えばTwitterでは、自分の胸の内にある不満や愚痴などのネガティブな感情を発信することを目的としたアカウントである「裏アカウント」というものが存在する。多くの友人とつながっているアカウントとは別に、少人数の親しい友人、あるいは自分一人だけが見ることができるよう範囲設定がされたアカウントのことである。この裏アカウントやInstagramのストーリー機能を用いた不満の吐露は、人によっては日常茶飯事におこなわれており、その内容は、身近な人間関係、アルバイト、社会に対してなど様々であるが、「キラキラ」とした世界とは別に、そのような負の部分も、若者のSNSには存在しているのだ。

ところが、このようなデータもある。内閣府のおこなう生活満足度調査によると、現代の日本の若者の生活満足度は高く、今の生活が「幸せである」と答える若者は、全体の約7割に近いことが証明されているというものだ(古市 2011:98)。若者の生活満足度は高いというデータがあるにもかかわらず、なぜSNSを見る限りでは、若者の不満や愚痴は多いように見えるのだろうか。このSNSでのネガティブな側面と、現実のデータ上でのポジティブな側面という相反する若者の姿に違和感を覚え、その若者の不満の原因や背景には、単純な「不満」という単語では片づけることのできない社会的な問題が背景にあるのではないだろうかと考えた。

前掲の古市(2011)をはじめとした先行研究では「若者の幸福」のあり方は明らかにされてきたが、若者の不満や愚痴といったネガティブな感情についての研究はされておらず、それについての社会背景や要因を明らかにした研究は見当たらない。また、2020年初旬から日本国内でも流行し始めた新型コロナウイルス感染症の拡大は、「不満」を含む若者の意識に少なからず影響を及ぼしたはずである。そこで、筆者のSNSアカウントを使用し、実際の若者の不満に関するデータ収集と分析に加え、実際に現役大学生の若者を対象にしたアンケート調査等を通じ、最新のデータから、若者が何に不満を抱いているのか、抱く不満にはどのような社会背景が隠れているのかなどについて項目ごとに仮説を立てた上で、若者のネガティブな感情のあり方を、社会学的に考察し、明らかにすることを、本論文の目的とする。それによって、これまでの社会学研究で描き出されてきた若者像を相対化し、別の角度から捉えなおすことが、本論文の意義である。

第1章 これまでの若者論で語られてきた若者像

1-1 今が幸せな若者たち

まずは、これまで社会学の中で若者がどのように分析されてきたのかを、先行研究をもとに整理していく。

冒頭部分で述べた「現代の若者の生活満足度は高い」という結果について、内閣府がおこなう「国民生活に関する世論調査」によれば、2010年時点で20代男性の65.9%、20代女性の75.2%が現在の生活に「満足している」と回答している。日本では2005年頃から非正規雇用問題やワーキングプア、就活戦線等で、メディアが若者に対して「不幸な若者」や「かわいそうな若者」などといった「不幸な若者像」を築き上げてきたが、そのような表象のされ方に反し、20代の若者の約7割は生活に満足しているというのだ（古市 2011：99）。しかし、若者の生活満足度が高い一方、同調査の中で「日ごろの生活の中で、悩みや不安を感じているか」という質問に対する回答では、20代の63.1%が「悩みや不安を感じている」としており、半数以上の若者が自分のことを「幸福だ」と感じているが、同時に「不安だ」とも思っているという（古市 2011：100）。この過去40年間でほぼ最高の数値を示す若者の生活満足度と、将来に対する希望を持つ若者の割合の低さの結果に対し、古市憲寿の『絶望の国の幸せな若者たち』（講談社出版）の中では次のように分析されている。

人はどんな時に「今は不幸だ」「今の生活に満足していない」と答えることができるのだろうか。大澤（元京都大学教授 大澤真幸）によれば、それは、「今は不幸だけど、将来はより幸せになれるだろう」と考えることができる時だという。将来の可能性が残されている人や、これからの人生に「希望」がある人にとって、「今は不幸」だと言っても自分を全否定したことにはならないからだ。逆に言えば、もはや自分がこれ以上は幸せになると思えない時、人は「今の生活が幸せだ」と答えるしかない。つまり、人はもはや将来に希望を描けない時に「今は幸せだ」「今の生活が満足だ」と回答するというのだ（古市 2011：102-103）。

（中略）

幸せな若者の正体は、「コンサマトリー」という用語で説明することもできる。コンサマトリーというのは自己充足的という意味で、「今、ここ」の身近な幸せを大事にする感性のことだと思ってくれればよい。何らかの目的達成のために邁進するのではなく、仲間たちとのんびりと自分の生活を楽しむ生き方と言い換えてもいい。つまり「より幸せ」なことを想定した未来のために生きるのではなく、「今、とても幸せ」と感じられる若者の増加が、「幸せな若者」の正体なのではないだろうか（古市 2011：104-105）。

つまり、現代の若者の言う「今の生活に満足している」「幸せだ」という意識は、未来に希望を持っていないから抱かれる満足感であり、若者は未来に幸せを期待せず、「今」の小さな幸せを大切にする傾向にあるといえる。そのため、若者はその小さな「今」の幸せを脅かそうとするものに強い不安、不快感を抱くのではないだろうか。これにより、若者は他者の行動に敏感になり、自分に不利益になることがあると、それがどれだけ些細なことであっても不快感を抱くと考えられる。そしてそれが、SNSなどを通じて不満を発信するという、ネガティブな側面の表れにつながっていくのではないだろうか。

次に、生活満足感が高い若者たちが持つ生活目標について見ていく。片桐新自の『時代を生きる若者たち』（関西大学出版）における大学生調査では、若者の生活目標を「その日その日を自由に楽しく過ごす」「しっかりと計画を立てて豊かな生活を築く」「身近な人たちと和やかな毎を送る」「みんなと力を合わせて世の中をよくする」の4つの項目にわけアンケート結果を示した。1987年におこなった調査の結果では「みんなと力を合わせて世の中をよくする」が最も回答率が低く、その他3つはほぼ同数の結果であった。それから2007年までは「身近な人たちと和やかな毎を送る」が大きく増え、他2つの回答を引き離し、「その日その日を自由に楽しく過ごす」と「しっかりと計画を立てて豊かな生活を築く」は毎回順位を交代させつつも全体としては減少気味の傾向にあった。しかし、2012年から「その日を自由に楽しく過ごす」の回答率が大幅に増え、2019年、ついに「身近な人たちと和やかな毎を送る」を抜き最も多いという結果となっている。これに対し、片桐は「もっとも刹那主義的な「その日その日を自由に楽しく過ごす」という生き方を選択する人が増えたというのは、そうした意識が（震災などの）短期的な事象に影響されたものではなく、日本社会の先行き不透明感—不透明化社会—が、構造的なものとして若者たちに認識されていると見るべき」と述べている（片桐 2019：196）。つまり、この若者の刹那主義的な生活目標の結果についても、先ほど述べた大澤の分析と同様のことが言えるだろう。片桐の言う「先行き不透明感」、すなわち大澤による未来が明確に見えないゆえに「いま」を大切にするという傾向が、やはり若者の中にあるのだと読み取ることができるのではないだろうか。

1-2 「優しい関係」の中の若者たち

続いて、若者の不満について考える中で、その要因の大きな割合を占めるのが、社会的事象ではなく若者を取り巻く人間関係であろうと考えられるため、人間関係、特に若者に見られる特有な友人関係について、社会学ではどのように考察されてきたのかということについて見ていく。土井隆義の『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』（ちくま新書出版）によると、現代の若者たちは、周囲の人間と衝突することを避け、相手から反感を買わないよう、かつてより常に高度で繊細な気くばりを伴った人間関係を営んでいるという（土井 2008：16）。この現代の若者の友人関係を、土井は「優しい関係」と呼んでおり、対立の回避を最優先にし、他人と積極的に関わることで相手を傷つけること、また自分が傷つけられることを危惧する「優しさ」の表れであると述べている（土井 2008：8）。つまり、現代の若者は傷つけあうことをおそれ、「触れない」ことが「優しさ」であると考えているのである。同様に、吉野ヒロ子も『つながりをリノベーションする』（弘文堂出版）において、傷を共有することで癒そうとしてきた「やさしさ」は、相手への負荷を考慮し傷を共有しない、傷つけ傷つけられることを回避するための「予防としてのやさしさ」へと変わっていったと述べられている（吉野 2016：16）。いずれも、現代の若者は「空気」を大切にし、相手と深くかかわらないことで自分自身の居場所を守り、傷つかない選択をとっているというのだ。また、吉野は次のようにも述べている。

つきあう相手を選べる自由は、自分がつきあう相手として選ばれないかもしれない不安と表裏一体の自由です。だから、「空気を読んで」雰囲気壊さないようにする、「キャラ」で盛り上げるというつきあい方が主流になってきたのではないのでしょうか。ただし、こ

れではネガティブな気持ちを発散することができません。「重い話」は相手に負担をかけてしまい、自分が切られてしまうかもしれません。だから、専用アカウントでネットに吐き出す人も出てくるわけです(吉野 2016 : 19)。

このように、相手の深いところに踏み入れない、つまり「触れない」「優しさ」を大切にしているため、友人とともにいる場では、内心思う正直な感情の部分、つまりネガティブな感情を発信することができず、SNSを用いて不満や愚痴を発信することにつながっているのではないかと考えられる。また、こうした空気感を大切にすると雰囲気や、SNSを介してでしか吐き出せない環境も、若者のストレスの要因の一つとなり、より不満を助長させているのではないだろうか。

第2章 データから考える若者の不満の現在

第1章では、これまで研究されてきた若者の姿を整理してきた。この章では、SNSで実際に筆者が観察した若者の不満と、実際に現役大学生を対象として2021年10月におこなったアンケート調査(質問紙調査)をもとに、「いま」を生きる若者の実態を分析していく。このアンケート調査は、若者は何に不満を抱いているのか、なぜ不満を抱いているのかという、SNSに吐かれていない潜在的な不満を明らかにすることを目的としておこない、奈良県立大学・京都文教大学・甲南大学の学生106名(男41名、女65名)、2年生4年生から回答を得た。2020年初旬から日本国内でも流行し始めた新型コロナウイルス感染症の影響により、従来の若者のようにコミュニケーションを図ることが困難になったことも併せ、それがどのように若者の人間関係や不満に影響しているのかということも含めながら考察をしていく。

2-1 コロナ禍における若者の生活満足度

筆者がSNS上で見る若者の一部は、日々多くのことに関して不満を抱いているのかのように見えていたが、実際、今を生きる若者は本当に不満を抱いているのだろうか。まずは、第1章で示した2010年時点での若者と、2021年現在の若者を比較するため、若者の生活満足度、生活目標に関する質問をおこなった。

現代の若者の生活満足度において、新型コロナウイルス感染症により、緊急事態宣言の発令や外出自粛の生活、オンライン授業の実施などの様々な制限がされてきたため、「満足している」と回答する若者は少数であるだろうと予想していた。しかし、「Q1 現在の生活にどの程度満足していますか」と質問したところ、「かなり満足している」が12.3%、「どちらかといえば満足している」が70.8%、「どちらかといえば不満だ」が16.0%、「かなり不満だ」が0.9%という結果であり、満足していると回答した若者は全体の約8割を超え、若者の生活満足度は2010年時と変わらず、むしろ少し高まっているという結果となった(図1)。制限の多いコロナ禍という状況下でこの結果は予想外であったが、やはり、この生活がいつまで続くかわからず、先の見えない未来に期待を抱けないと若者が考えているとすると、第1章で述べた、「未来に期待を抱けないから今が満足である」という相対的な思考に至っているのだろうか。

しかし、この生活満足度を問う質問と併せて、「Q2 未来は今よりも良くなっていると

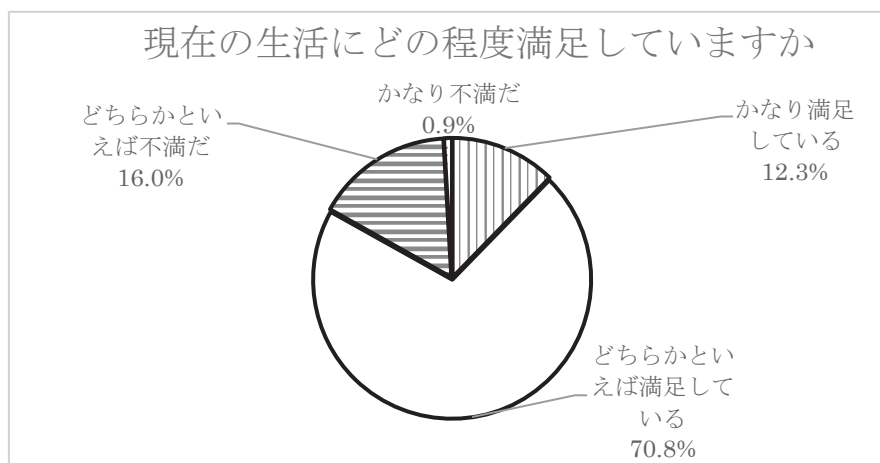


図1 「Q1 現在の生活にどの程度満足していますか」

「現在の生活にどの程度満足していますか」という質問をしたところ、「そう思う」が12.3%、「どちらかといえば思う」が56.6%、「どちらかといえば思わない」が28.3%、「思わない」が2.8%と、未来が現在よりも良いものになると期待する若者が、約7割もいるという結果となった(図2)。先ほど、若者の生活満足度が高いのは、「未来に期待を抱けないから今が満足である」という思考に至っているからではないかと述べた。だが、この考え方であるとするならば、この「未来は今よりも良くなっていると思う」という、未来に期待を大きく抱いている結果は、現在の若者の生活満足度が高いという結果を解釈する際に、大澤の述べていたことと矛盾が生じる。若者は、今の生活にも満足しているが、未来は今よりずっと良いものであると期待しているのだろうか。コロナウイルスに対抗するワクチンの普及や規制緩和などで、少しずつではあるが、日常が元に戻る気配を見せつつある。しかし、社会的な観点から見ると、経済的には大打撃であり、コロナウイルスによって失われたものを完全に取り戻し、コロナウイルスが流行る以前の生活に戻るためにはまだまだ時間を要し、すぐに良い方向へと進むとは言い切れない状況にあるだろう。そのような状況下で現状に満足し、かつ未来に期待する若者の思考は、ある種前向きであるといえる。言い方を変えれば、楽観的な思考を持っているとも言え、「今、ここ」にある「個人的」な生活さえ満足であればいいというような、個人主義的な考え方であるともいえるのではないだろうか。また、この生活満足度で言われる「満足」に込められているものが、昔と比べると「妥協」も含まれた意味合いへと変化している可能性も考えられる。若者は「今、ここ」の身近な幸せを重視する傾向にあるため、大きな期待を社会には抱いておらず、小さな、ある程度の「幸せ」で満足をするという、いふならば妥協も含まれたゆえの「今の生活に満足している」という結果なのではないだろうか。

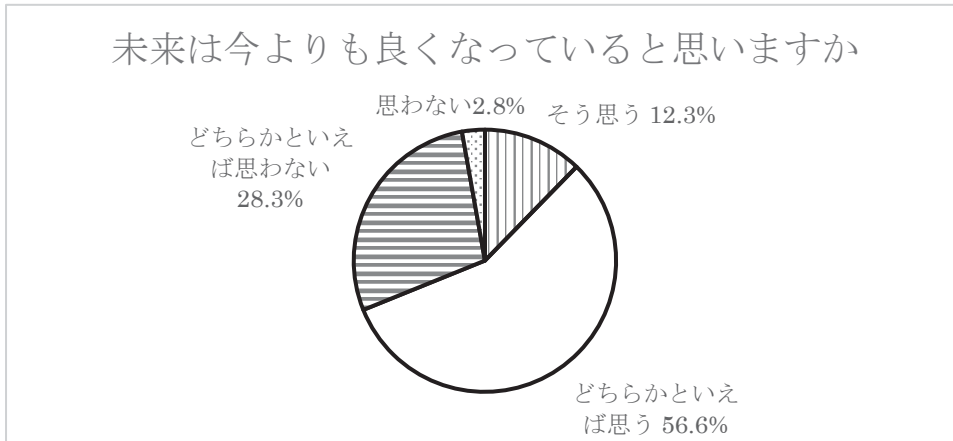


図2 「Q2 未来は今よりも良くなっていると思いますか」

次に、「Q3 人によって生活の目標もいろいろですが、あなたの生活目標に最も近いものは何ですか」という質問では、「その日その日を自由に楽しく過ごす」が39.6%、「しっかりと計画を立てて豊かな生活を築く」が17.9%、「身近な人たちと和やかな毎日を送る」が42.5%、「みんなと力を合わせて世の中をよくする」が0%という結果であり、2019年の結果から再度「身近な人たちと和やかな毎日を送る」が「その日その日を自由に楽しく過ごす」を抜き最も多い回答となった(図3)。この「身近な人たちと和やかな毎日を送る」と「その日その日を自由に楽しく過ごす」の2つの回答の共通点は、どちらも長期的な未来を見据えているというよりは、身近で些細な、「小さな」幸せを望んでいるということであるといえるだろう。また、「身近な人たちと和やかな毎日を送る」が最も多いという結果に対して、これもやはりコロナウイルスの影響があるのではないかと考えられる。自粛生活により、会える人物が限られた状況に置かれたため、家族や身近な友人との和やかな生活を求めるようになったのではないだろうか。このようにコロナウイルスが人間関係に与えた影響は、身近で些細な、小さな幸せを求める若者たちにとって、切実な意味を持っているといえるだろう。次は、この生活目標にある「身近な人たち」に対して若者がどのように感じているのかを見ていく。

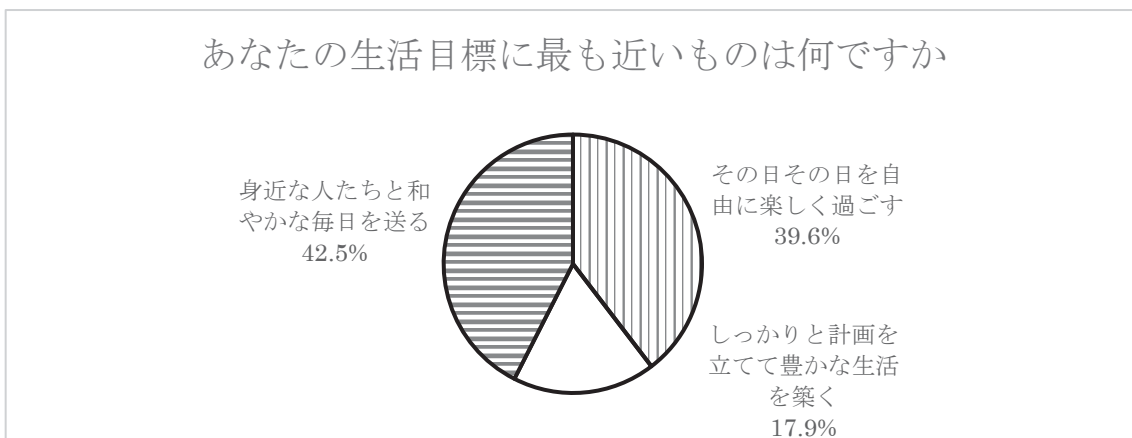


図3 「Q3 人によって生活の目標もいろいろですが、あなたの生活目標に最も近いものは何ですか」

2-2 若者の人間関係における不満

筆者のSNSアカウント上での若者の不満に関する投稿では、大きく「家族」「アルバイト先」「友人関係」に分類することができ、身近な人間関係に関する不満を観察することが多かった。そのため、アンケート調査でも、若者を取り巻く人間関係を上記3つに分類し、それぞれの不満の有無、その内容についての質問をおこなった。

まず、「Q4 自分の家族に対して不満がありますか」という質問に対して、「とてもある」、または「少しある」と回答したのは全体の22.6%という結果であった。どのような不満を抱いているのか、自由記述、SNS投稿で見られた意見は以下である。

- ・ 過保護、過干渉である
- ・ 親と性格や相性、考え方などの価値観が合わない
- ・ 気を遣う
- ・ 理不尽な扱いを受ける
- ・ 家庭環境が良くない

(アンケート自由記述より引用)

- ・ 家事を何もしない父親が母に偉そうにしてるの腹立つ(19.5.3)
- ・ 親とすぐ喧嘩してしまう(20.7.8)
- ・ 過保護すぎて嫌になる(20.7.8)
- ・ 性格が合わなさすぎる、無理(21.8.29)

(筆者のSNSアカウントより引用)

家族に対する不満は、きょうだいに対するものより、親との関係に対するものが多かった。また、親に対する不満でも、過干渉に不満を抱く者がいる一方で、不仲に不満を抱いている者もいるなど、正反対の理由での不満がみられた。この家族に対する不満の要因として、やはりコロナ禍により家族で過ごす時間が増え、同じ環境で生活を共にすることが多くなったことが一つに挙げられるだろう。「身近な人たちと和やかな毎日を送る」という生活目標が最も多いという結果から、若者は身近な人間関係を大切にしたいという理想を持っていることがうかがえる。その願望があるために、家という閉鎖的な空間でかかわりを持つ家族に対して、細かく余計な部分が気に障り、願望との差異から不満が生まれてしまうのではないだろうか。

次に、「Q5 アルバイト先への不満がありますか」において、「とてもある」「少しある」と回答した割合は、全体の29.2%であった。どのような不満を抱いているのか、自由記述、SNS投稿で見られた意見は以下である。

- ・ シフトの融通が利かない、勝手に変えられる
- ・ 時給が低い
- ・ アルバイトという立場であるのに負担が大きい
- ・ 社員の意識が低い
- ・ スタッフと性格が合わない

- ・社員、店長が嫌い
- ・ブラック
- ・お客さんに理不尽な文句を言われる

（アンケート自由記述より引用）

- ・休憩させてくれないバイト先終わってる(20.4.20)
- ・くそ客ばっかのバイト行きたくない(20.6.18)
- ・コロナが怖いならイオンにご飯を食べに行くな(20.12.14)
- ・閉店5分前に来る客非常識すぎる(20.12.12)
- ・仕事内容と給料が見合ってなさすぎ(21.1.7)
- ・シフト勝手に変わってて腹立つ(21.10.25)
- ・無理って言ってるのにシフト入れられた(21.11.27)

（筆者のSNSアカウントより引用）

アルバイト先への不満において、客という「外部」に対するものもいくつか見受けられたが、大部分は社員やスタッフといった「内部」に対するものであった。筆者自身がアルバイト先への不満を挙げるとするならば、理不尽な態度や要求をしてくる客に対してのものが中心となるため、若者のアルバイト先への不満の内容が、客よりもスタッフ間のものであることに少し意外性があった。この結果から、現代の若者は、客という一瞬の時間しか共有しない、限りなく薄いつながりである他者に対しての不満はある程度割り切っており、逆に共に働くスタッフや店長など、自分にとって身近な人間関係を特に重視していると見ることができるのではないだろうか。これは、前述のように多くの若者が持っている「身近な人たちと和やかな毎日を送る」という生活目標と合致するものと言えるだろう。

最後に、「Q6 友人関係を築く中で友人に対する不満はありますか」という質問において、「とてもある」「少しある」と回答した割合は、全体の11.3%と、3つの対象に対する不満度の内、最も低い結果であった。何に不満を抱いているのか、自由記述、SNS投稿で見られた意見は以下である。

- ・距離感のつかみ方が難しい
- ・気持ちがわからない
- ・価値観が合わなくしんどい

（アンケート自由記述より引用）

- ・インスタで陽キャが楽しそうなのを見てるのがしんどい(21.1.1)
- ・計画立てる時何も考えず仕切って大事なことだけ任せてくるの無責任すぎ(20.11.13)
- ・約束の時間くらい守れや(20.11.20)

（筆者のSNSアカウントより引用）

筆者が若者の不満の要因の中で、最も回答率が高くなるであろうと予想していたこの質問では、「不満があまりない、全くない」と回答した割合のほうが約9割近くと非常に多く、

現在の若者は、友人関係に不満をあまり抱いていないようであった。「友だち地獄」(土井2008)と称され、「空気を読む」ということが主流になっているといわれてきた若者の「優しく」窮屈な友人関係を考えると、この結果は予想外である。だが、この結果からは、若者の友人関係の在り方が変化しつつあるということも考えられるのではないだろうか。

コロナウイルスにより大学のサークル活動が制限されたことや、飲み会やイベントなど友人と関わる機会が減少したことは、若者の友人関係に少なからず大きな変化をもたらしたであろう。実際に、筆者が所属するゼミナール内で「コロナ前と後で友人関係に変化があったか否か」という議題が出た際、「本当に仲の良い子とだけつながりを保つようになった」と回答したゼミ生が複数名いた。「コロナ禍で友人関係の線引きがはっきりとした」という意見もあり、大学の講義やサークル活動で、定期的に顔を合わす機会があった時にはあいまいな線引きで友人として認識されていたものが、リモートでの講義やサークル活動の制限により、顔を合わす機会が失われると、連絡を全く取ることもなくなり、「顔見知り程度の知り合い」という関係に戻ってしまったと感じたという。SNSの普及により、相手の生活を知ることができるが、知れてしまうからこそ、そこから個人的な連絡を取る相手と取らない相手の選別がされてしまうようになったのではないだろうか。そしてそれにより、リアルでの煩わしい関係がリセットされた気がして、友人関係の不満が減少したといえるのではないだろうか。このことは、「Q7 友人関係を窮屈である、煩わしいと感じたことがあるか」というアンケート結果からも読み取れることができる。若者の友人関係について「不満がある」と答えた割合が11.3%であったのに対し、これまでに友人関係を「窮屈だ、煩わしい」と感じたことが「とてもある」「少しある」と回答した割合は49.0%と約半数にものぼったのである。この結果は、今の友人関係に不満はないが、過去には不満を感じたことがあると解釈することができ、やはりコロナウイルスによって制限された人とのかわりには、若者の友人関係の考え方にも影響を与えていると考えられる。

また、現在大学1年生、2年生にあたる学年の若者は、コロナ禍により、サークル活動等の上下関係を伴う人付き合い、飲み会やイベントなどが一切されることのないキャンパスライフを余儀なくされたということもあり、友人関係について悩むことができるほどの友人関係を新たに築くことができていないということも、友人関係の不満があまりないという割合の高さにつながっているのではないだろうか。

2-3 コロナ禍がもたらした若者の不満

SNSで見られる不満や、アンケート調査の自由記述で述べてもらった若者の不満の中には、コロナウイルスが原因である不満も複数見受けられた。実際のTwitterで投稿されていたツイートや内容、アンケートの自由記述欄に書かれていた不満は以下である。

- ・コロナによって旅行などの好きなことが気軽にできない
- ・リモート講義になり課題が増えた
- ・大学生らしい生活が送れていない
- ・マスクによる肌荒れが辛い
- ・コロナで大学がなく頼れる人がいなくて不安
- ・バイト先が休業しお金がない

（アンケート自由記述より引用）

- ・濃厚接触者になり監禁生活。遊んでる人がうらやましい。(21.1.1)
- ・コロナに対する価値観で友達でも軽蔑する(20.12.12)
- ・感染対策の座席減少を無視する客がいて迷惑(20.12.20)
- ・観光業に就く友人の、政府の政策に振り回されることへの不満
- ・緊急事態宣言下に遊びに行く友人への不満
- ・学校行事の中止や制限に対する不満
- ・学費は変わらず大学生だけが対面講義が再開されないことへの不満
- ・周りの目を気にしながら外出をするストレス
- ・マスクやビニールの仕切りにより声が聞こえづらいアルバイト上のストレス

（筆者のSNSアカウントより引用）

コロナウイルスにより抱かれた不満は、ストレスや不安感など様々なものがみられたが、最も不満であったことは、「自由」を制限されていることに対してではないだろうか。よく、大学生活はモラトリアム期間と称され、「一人前の大人になること」への猶予期間であるといわれており、人生の中でも自由な時間が多い時期である。本論文における「若者」とは、現役大学生を対象としているため、本来ならば自由で様々なことに挑戦し、経験を積めるはずの大学生活が、外出自粛や様々な制限により行動を縛られたことで、不自由に感じる者が多いと考えられる。よって、コロナウイルスが原因の不満も、自由が制限されていることに対してや、自分は不自由な生活を送っている一方で、他者が自由にふるまっていることに対して、嫉妬や不公平感を感じて抱く者が多いのだろう。

第3章 個人的・短期的な不満を抱く若者たち

ここでは、第2章でアンケート調査の結果から明らかになった若者の不満の内容より、その「不満」のあり方とはどのようなものであるかということについて、さらに掘り下げて考察していく。

3-1 社会的な不満と個人的な不満

SNSで収集した若者の不満ツイートの内容とアンケート結果からまず言えることは、現代の若者が抱く不満というものは、きわめて「個人的な」不満の割合のほうが高いということではないだろうか。

昭和期には、学生が主導するデモや闘争など、いわゆる学生運動が活発におこなわれており、若者を中心に、社会に対しての不満を社会運動という形で露わにさせてきた。選挙の投票率も今現在より高く、若者の敵はいうなれば「国家」というような大きな相手、大きな主語であった。しかし、「Q8 コロナウイルスが流行する以前に、政府や自治体の方針に不満を抱いたことがありますか」という質問に対して、「とてもあった」「少しあった」と回答した若者は合わせて35.9%と過半数にも満たないものであった。このアンケート結果や、総務省が提示する若者の投票率を見ていると、現代の若者の政治への興味関心は極めて低く、「若者の敵は国家」とはとても言えない状況である。「Q9 コロナウイルス関連で政府

や自治体の方針に不満を抱きましたか」の回答では、「とても抱いた」「少し抱いた」が合わせて75.5%と、コロナウイルスにより若者の政治への興味関心が高まったように一見思えたが、「Q10 コロナウイルスが収束した後、政治に興味関心を抱くと思いますか」という質問に対しては、「思わない」「どちらかといえば思わない」が合わせて64.2%という結果となり、政治への興味関心は刹那的なものであると見て取れる。事実、アンケート調査においてSNSで発信する不満の内容を聞いたところ、これまで提示してきた自由記述の結果からもわかるように、政治に関する不満は一つもなく、身近な人間関係や日常生活の中で起こった些細なことに対する不満ばかりであり、自分本位の不満が中心であった。筆者のSNSのタイムラインを眺めていても、首相交代や国際情勢など、世間的に話題にされている事柄に関して言及するようなものは一切見受けられなかった。これにより、若者は政治などの大きな規模の、今この瞬間に直接自分が不利益を被るわけではない事柄に関しては、無関心であるとして取れる。コロナウイルスに関連する不満も、それに対する政府の対応や経済状況を鑑みるものではなく、行動制限など自由を奪われることに対する、「今」の「自分」に直接不利益になることに対してばかり不満を抱いている様子が見られた。これらのことから、現在の若者は様々な社会的事象に関して、大きな枠組みで物事を考えることができず、個人主義的な考え方を持っているといえるのではないだろうか。

3-2 長期的な不満と短期的な不満

次に、若者が抱く不満とは、恒常的に抱かれているものであるのか、それとも刹那的に生まれるものであるのかという、不満の持続性について考えていく。先ほど、若者の不満は、社会的ではなく、個人的なものが大きな割合を占めているのではないかと述べた。それに加え、SNSからの情報収集やアンケート調査の結果から、若者の不満は刹那的に生まれ抱かれるもの、つまり「短期的な不満」が多いといえるのではないだろうか。

アンケート内で回答を得たSNSで発信する不満の内容から、若者が抱く不満の内容を見ると、アルバイトや学校、日常生活で起こったことなど、身近な事柄に対しての不満が大半を占めている。回答の中には「その時に思ったこと」を不満としてSNSで発信するという意見もあり、若者が抱く不満は、身近な他者に対して瞬間的に感じたものが多いと見ることができるだろう。また、第2章2-1で、「若者は未来が今よりも良くなっている」と考えているという結果を述べた。しかし、コロナウイルスによる経済的な損害は計り知れず、社会がコロナ以前の姿を完全に取り戻すには、しばらくの時間が必要であるだろう。ワクチン接種の3回目を検討せねばならないとまで言われ始めている現在、どのような未来になっていくかなど予測ができないものとなりつつある。そのような中でも、若者は未来に期待しているのだという。これについて、現代の若者は、未来を具体的に想像する力や知識が欠如しているといえるのではないだろうか。あくまで漠然と「未来は今よりも良くなっている」と思っているだけであり、その思考に、政治・経済・社会の問題などは含まれていないだろう。それは、3-1で述べた、若者が政治などの社会的な事柄に対して無関心であるということからも考えられる。このことから、若者は目に見えづらくて想像力を伴う、未来へつながるような長期的な不満は抱かないが、身近な他者の行動など、今この瞬間に直接目に見え、かつ自分がその場で不利益を伴うような、短期的で利己的な不満ばかり抱いているといえるのではないだろうか。長期的な事柄に関しては、批判的な見方をす

ることができず、目に見える短期的な事柄にばかり目を向けがちであるといえるだろう。

第4章 SNSによる不満の可視化

次に、なぜ若者は、SNSでネガティブな感情を発信するのかということについて考えていく。第1章では、若者は対立をできる限り回避する「優しい」関係を大切にしており、対面において、互いの内面をさらけ出すことを避ける傾向にあるため、SNSを用いて不満を発信することにつながっているのではないかと述べていた。それに加えてこの章では、なぜ「裏アカウント」といった不満を発信するためのアカウントまで作成し、SNSで不満を発信していくのかという、不満が発信される理由について、SNSが持つ特性に着目し考察していく。

4-1 他者との比較から生じる不満

まず、SNSの持つ特性の最も大きな部分は、誰でも簡単に発信する側、受信する側のいずれにもなれるということであるだろう。それによって、SNSが普及する以前には知り得なかったものが可視化されるようになった。そこで、SNSにより最も可視化されたものとは何かということについて考えていくと、それはアメリカの社会学者、ロバート・キング・マートンのいう「準拠集団」ではないだろうか。準拠集団とは、自分の意識や態度を決定する際に基準とする、自分が所属する特定の集団のことである。彼は、準拠集団には「規範型」と「比較型」の2つのタイプがあると論じており、ここにおける若者の準拠集団とは、自分や他人を評価する基準の枠組みを与える集団を指す「比較型」であると考えられる。SNSでつながる他者（フォロワー等）の多くは、同輩や友人など、日常生活において身近な人物、あるいは自分と近く、同等程度の立場にいる人間であるだろう。そのような近い他者の生活の充実度が、SNSの普及により常に可視化され、自分との比較がより簡単におこなうことが可能となり、顕著に目に見えるようになってしまった。これにより相対的に不満を抱いてしまうようになったのではないだろうか。

この準拠集団の可視化が、実際に若者の中でされているのかを知るべく、「Q11 SNSで他者と比較した結果、自分自身に対して不満や劣等感を抱くことはありますか」という質問をしたところ、「度々ある」が15.1%、「時々ある」が32.1%の計47.2%という半数近い結果となった。さらに、この質問の回答結果を男女別にすると、「度々ある、時々ある」の回答数は、男性が22.0%、女性が63.0%となり、SNSを通じて他者と比較をおこなう若者は半数近く、その割合は女性のほうが圧倒的に高いということがわかった（表1）。この女性の割合が高いという結果については、若者の男女で、人間関係の構築のされ方に違いがあることが関係しているのではないかと考えられる。一般に、女性は男性と比較した際、単独で行動をするよりも群れて行動をすることが多く、それが「女らしさ」と見なされ、他者との調和を重視せざるをえない環境に身を置いているといえるだろう。そのため、直接的に他者と比較してしまう機会が男性よりも多く、自己と他者との差異に敏感になるために、上記のような結果となるのではないだろうか。そして、このアンケート結果から、やはりSNSによって可視化された他者の生活は、若者にとって比較してしまう材料の一つとなり、不満を抱く一つの要因となり得ると考えられる。

表1 「Q11 SNSで他者と比較した結果、自分自身に対して不満や劣等感を抱くことはありますか」

	度々ある	時々ある	滅多にない	全くない
男性	4.9% (2人)	17.1% (7人)	34.1% (14人)	43.9% (18人)
女性	21.5% (14人)	41.5% (27人)	26.2% (17人)	10.8% (7人)

そして、そのSNSによって可視化された他者の生活と比較することで抱いた不満は、自分によってSNSで吐き出されることでさらに他者へと可視化されていく。

SNSが普及する以前の若者は、不満を抱かずに生きていたのだろうか。若者の不満は最近になって抱かれるようになってきたのだろうか。もちろん、そんなことはない。いつの時代であれ、人々の胸の内には様々な不満が、多かれ少なかれ当然存在していただろう。しかし、SNS普及以前の不満は、直接人と会い、その会話の中で昇華されることが多かったのではないだろうか。その場合、他者の不満は会話の中でしか知ることができず、リアルタイムで流れていくそれに関して、その場で共感したとしても、その不満について深く考えることや自分のものとじっくり比較することは「対話」という性質上あまりなかったと考えられる。自分の不満、他者の不満を共有することはあっても、それは一時的なものに過ぎず、多くは潜在的で目に見えづらいものであったはずだ。だが、その潜在的であった不満は、SNSの普及に伴い、徐々に人の目に簡単に触れるようになった。つまり、不満がはっきりと可視化されるようになったのである。SNSによる他者の生活の可視化が若者に相対的な不満を抱かせ、その抱いた不満を発信することで、さらに不満の可視化がおこなわれる。このような不満の可視化を通して、それを見た人による「共感」が可視化され、さらに不満を発信することを助長させていくという循環が生まれている。

4-2 共有と共感

共感の可視化とは、SNSの「いいね」や「リツイート」、さらには「コメント」といった機能を通じてなされる。SNSで自分が発信した不満が、そのような機能などを通じて、目に見える形で他者からの共感を得ることが可能となった。これが、さらにSNSを利用し不満や愚痴を吐き出す動機付けにつながっていくのではないだろうか。

アンケート調査において、SNSを利用している若者が97.2%いる中で、「Q12 SNSで不満や愚痴を発信することはありますか」という質問をしたところ、「度々ある」と回答した人が10.4%、「時々ある」が17.0%と、不満を発信する若者は全体の3割にも満たない結果であった(図4)。この結果や、第2章での若者の幸福度、人間関係の不満度の結果を見てみると、現代の若者は、筆者が考えているよりも不満を抱いていないのではないと思われる。しかし、「Q13 SNSでの他者の不満や愚痴に共感することがありますか」という質問の結果は、「よく共感する」が7.5%、「たまに共感する」が55.7%、「あまり共感しない」が28.3%、「全く共感しない」が8.5%というものであり、「共感する」と回答した割合が全体の63.2%、つまり過半数を超えるのだ(図5)。特に不満を抱くことはなく、SNSで発信もしないが、他者の不満には共感する。この結果から、若者は自発的に不満を抱くのではなく、他者が発信する不満に共感することで、何気なく抱いていた不満に気づくのではないだろうか。つまり、不満の有無を問われれば「不満はない」と回答するが、他者の不満がSNSにより共有

され、他者の不満が可視化されることにより、その不満に共感し、自分が抱く不満に気が付き、それをまた発信していくという循環が起こっているのではないかと考えられる。そして、この不満の共有と共感が繰り返されることで、SNSで若者の不満がしばしば見受けられるようになるのではないだろうか。したがって、若者の抱く不満とは、他者の共有を経て初めて気づく程度の小さく潜在的な不満にすぎないと考えられる。

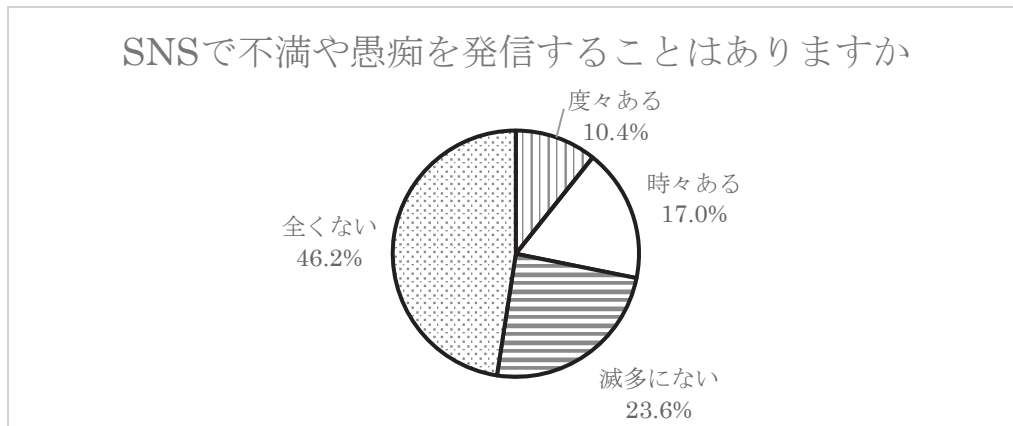


図4 「Q12 SNSで不満や愚痴を発信することはありますか」

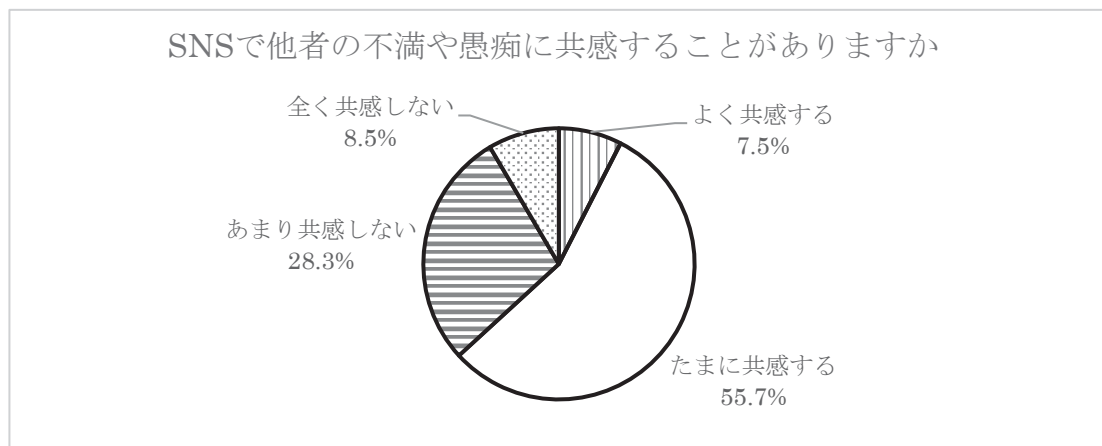


図5 「Q13 SNSで他者の不満や愚痴に共感することがありますか」

また、第3章で、若者が発信する不満はどれも個人的で、短期的なものであると述べた。若者が抱く不満には、「国家」や「政府」といった大きな主語のものは見られず、いずれも身近で小さな主語が主体の不満であり、一時的に感じた不満を発散させるというような短期的な不満ばかりであるということだ。この若者の不満が小さなものである理由として、「共感」が大きく関わってくるのではないだろうか。先ほど、若者は他者の不満に共感し、それを受けて不満を抱くようになるのではないかと述べた。そして、その共感はい「いいね」や「リツイート」などで「共感されている」と目に見えるようになった。つまり、反対に、若者は他者からの共感を求め、あえて小さな主語の不満ばかり共有するのではないだろうか。逆に、社会に対する不満（＝批判）を発信しても、「過激な人間」と思われるだけで、共感されることは少ないだろう。小さな不満、誰でも感じたことのある些細な不満であれば、共感されやすく、かつ目に見える形で共感されるため、SNSで不満を発信し他者に共有しようとす

るのではないかと考えられる。つまり、SNSの普及により、小さな不満が可視化され、その不満が共感を呼ぶ社会になってきているといえるだろう。

おわりに——「不満」から「愚痴」へ

ここまで、先行研究やSNSの投稿分析、アンケート調査を通じて、現代の若者の不満のあり方を分析してきた。その結果、現代の若者はアンケート上では「現在の生活に満足」しており、未来への期待値については、少しは良くなるだろうというような楽観的な思考を持っているということが明らかとなった。また、自発的にSNSで不満や愚痴を発信するという若者は少数であり、一見、現代の若者は不満をそれほど抱いていないのではないかと考えることもできる。しかし、「他者の不満には共感する」という若者が多数存在することや、SNS上での他者と比較して不満を抱くことがあるという結果から、現代の若者は自発的に不満を抱くのではなく、他者がSNSで不満や愚痴を発信して初めて気づく程度に不満しか抱いていないといえるだろう。そして、その若者の「不満」というものは、社会などの大きなものに対してではなく、日常生活の些細な、小さく個人的なものであり、「不満」と呼ぶよりは、「愚痴」と呼ぶに値する程度のものではないだろうか。「不満」は「抱くもの」または「ぶつけるもの」であり、個人の中にとどめておくか、または社会に投げかけることにつながるが、「愚痴」は身近な他者に「こぼす」ことを前提とするものにすぎない。この「他者にこぼす」という行為は、SNSの普及により容易におこなうことが可能となった。それにより、SNSを用いて「愚痴」を投稿する、共有するという若者の行動につながっていると考えられるだろう。また、「不満」というような大きくて強いものではなく、より単純で意味を持たない「愚痴」を発散しているため、若者には「不満を抱いている」という自覚があまりないのだと考えられる。つまり、若者の「不満」とは、他者から共感されることで解消される、その時限りの小さなものであり、決して現状を変えるために行動に移すことや、社会的な事柄に批判的な目を向けるというようなことには結びつかないものである。「不満はない」と言いながら、些細でとりとめもない「愚痴」を発信し、他者からの「いいね」などの可視化された共感を得て満足しているということが、現代日本における若者の「不満」の正体だといえるだろう。身の回りの小さな世界への愚痴を発信することで満足感を得る現代の若者には、大きな事柄に対しての批判精神が欠けており、長期的に、自分が生きていく世界を客観的に見て行動に移していくという姿勢が失われているのではないだろうか。

研究を始めた当初は、「不満」という単語に対しネガティブなイメージしか抱いておらず、「不満」と「愚痴」を同じものであると捉えていた。しかし、研究を進める中で「不満」を抱くということは必ずしもマイナスなことだけではないということに気が付いた。不満を抱くということは、その不満に対する打開策を考える力や、現状を変えようと行動につながる原動力になりえるからである。だが、現代の若者の不満、つまり研究結果でいう「愚痴」は、何も生むことはないだろう。筆者自身SNSに小さな不満を「愚痴る」という経験があり、現代の若者と同様に、身近で些細な愚痴をSNSに発信し共感を得ることで、その物事に対する不満という感情を片付けてきた。この「愚痴をこぼす」ということは、その時に刹那的に感じて発散して終わる雲散霧消のような感情と行動であり、批判的に社会に目を向けるというような強い意識はやはり持っていないのだと経験上言うことができる。この自分自身が「不満」だと思っていたものの正体が、不満と呼ぶこともできないような小さく個人的な

ものであったという気づきを得たという点において、この研究は自分自身を客観的に見つめ直すものであったと思える。筆者も含む若者に欠如している社会への批判精神や興味関心を養っていき、本当の意味で「不満」を抱くことができるよう、広い視野を持つ意識を高めていくことが、現代の若者が生きていく社会の未来をより良い方向へと導くために必要なことではないだろうか。

参考文献

- 古市憲寿, 2011, 『絶望の国の幸福な若者たち』講談社
- 片桐新自, 2019, 『時代を生きる若者たち—大学生調査30年から見る日本社会』関西大学
- 土井隆義, 2008, 『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房
- 吉野ヒロ子, 2016, 「ソーシャルメディアと流動化する人間関係」田所承己・菅野博史編『つながりをリノベーションする時代—〈買わない〉〈恋愛しない〉〈働けない〉若者たちの社会学』弘文堂
- 総務省, 2020, 「令和3年版 情報通信新書」
(2021年11月8日取得, 01honpen.pdf (soumu.go.jp))
- 総務省, 2020, 「国政選挙における年代別投票率について」
(2021年11月8日取得, 総務省 | 国政選挙の年代別投票率の推移について (soumu.go.jp))